

26	学校名 精華町立山田荘小学校	24～26
----	----------------	-------

平成26年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

21世紀型市民としての生きる力を育成するため、「人間力活動科」を新設し、知識基盤社会に必要な「論理的思考力を基盤とした人間関係力・セルフマネジメント力」を中核に、よりよく自立（自己実現を核として）し、様々な人々と共生する資質の向上を図るための教育課程・指導方法の研究開発

2 研究の概要

「人間力活動科」を新設し、よりよい自己実現をめざして自立し、様々な人々と共生する資質の向上を図るため、知識基盤社会に必要とされる人間力の要素のうち「論理的思考力を基盤とする人間関係力、セルフマネジメント力」を発達段階に応じた課題に取り組む中で育成する。

具体的には、「人間力活動科」で、教育活動を貫く「論理的思考力」、「人間関係力」、「セルフマネジメント力」を育成するため、自立（自己実現）や共生に関わる課題を設定し、「論理的に考える活動」を基盤に「人間関係を高める活動」や「自分づくりの活動」を相互に関係付けながら取り組む内容とする。同時に、各教科・領域に相互作用を図り、課題解決や価値ある新しいモノ・コトへの創造に意欲的に立ち向かう人間力の基盤を育てる指導方法を開発する。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

ア 研究の目的

到来している知識基盤社会の進行、グローバル化や技術革新の急速化に伴う様々な課題の増加、超少子高齢化等による社会不安、また東日本大震災の復興を含め新たな日本社会の再建を目指しつつ複合的な問題に直面しながら、激動する社会にあって、「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」（中央教育審議会答申）で指摘されているように、各個人が「自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」（人間力）を身に付けることは日本社会の重要な課題であると考え。特に、学校教育においては、その力の基礎となる資質・能力を育成することが喫緊の課題である。

こうした社会状況の中で、本校の多くの子どもたちは、おおむね伸びやかに成長しているが、

- 課題解決のため筋道立てて考え説明する力や適切に話し合う力に弱さがある。
- 自己中心的な言動や他者依存的な態度等も少なくない。
- 協働的な活動の展開や主体的な課題解決に弱さが見られる。

こうした児童の現状や社会の要請を踏まえ、知識基盤社会に必要とされる人間力の要素として、論理的思考力、自他を尊重する人間関係力、セルフマネジメント力をはぐくみ、主体的な課題解決への意欲や能力を育て、自立（自己実現）し、共生する資質や態度を育てることが必

要であると考えた。

そこで、本校で取り組んできた実践研究の成果を踏まえ、「人間力活動科」を新設し、21世紀型市民としての人間力の基盤を、発達段階に応じた自立（自己実現）と共生に関する課題に取り組むことを通して、「論理的思考力」を基盤に「人間関係力」「セルフマネジメント力」を育成し、自立（自己実現）し共生する資質や態度をはぐくむことを研究の目的とする。

イ 研究の仮説

① どのような手段か

「人間力活動科」に自立（自己実現）や共生に関する具体的課題に取り組む学習を設定し、「論理的思考力」「人間関係力」「セルフマネジメント力」を相乗的に育成し、各教科・領域の学習との相互作用を図ることで、21世紀型市民としてよりよく自立（自己実現）し、様々な人々と共生する資質をもつ人間力の基盤を育成する。

「人間力活動科」を教科とする理由は、知識基盤社会に必要とされる「論理的思考力を基盤とした人間関係力・セルフマネジメント力」を中核とする自己実現や共生の資質を子どもたちに確実に身に付けさせるため、目標、内容、評価を明確にした教育内容とし、効果的に育成することがふさわしいと考えたためである。

また、全教育活動で育成されてきた「論理的思考力・人間関係力・セルフマネジメント力」を教科として統合的に位置付けることで、より系統的・意識的に育成することができると考えたためである。

具体的には、自立と共生に関する課題と関連させた学習内容を、学級での学びが学校全体や地域社会での学びと関連する総合単元的学習「ユニット学習」として設定し、人間関係力や社会性を育成するとともに、自立（自己実現）に向けた系統的な学習を構成していきたい。

② どのような成果を期待するのか

これらの学習を通して、自分の思いや考えを筋道立てて考える論理的思考力・表現力、適切に話し合う力を基盤として、共生の意識をもつ人間関係力を育成し、自己実現にむけて、自分の感情や意志をコントロールしながら、なりたい自分を作り出すセルフマネジメント力を育成することができると考える。さらに、問題解決や創造への主体的な意欲、探究する力を高め、望ましい集団活動が活性化できるという効果が考えられ、21世紀型市民としての人間力の育成につながると考える。

(2) 教育課程の特例

ア 新設教科

「人間力活動科」	授業時数	低学年	年間	70時間
		中・高学年	年間	105時間

イ 既存教科の授業時数変更に伴う対応案

「人間力活動科」に充てる既存教科の授業時数及び対応は下記のとおり、

○低 学 年

第1学年 学級活動から34時間、生活科から36時間、計70時間

第2学年 学級活動から35時間、生活科から35時間、計70時間

○中・高学年 学級活動から35時間、総合的な学習の時間から70時間、計105時間

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

「人間力活動科」 (年間 低学年70時間 中・高学年105時間)

21世紀を生き抜く人間力として必要となる「論理的思考力」「人間関係力」「セルフマネジメント力」の要素を、それぞれの視点から設定した相互に関係付けた学習活動に構成し、それぞれの能力を高めながら、基本的な資質を身に付けるようにする。

各学年の発達段階に応じて必要な課題については、各学習活動に「自立」「共生」に関わるテーマを設定し、学期に応じて段階付けながら取り組む。

ア 「人間力活動科」で育てたい力

本校では、育てたい「人間力」に必要な力を「論理的思考力」を基盤とした「人間関係力」「セルフマネジメント力」とし、三つの力を次のように表している。

- | |
|--------------------------------------|
| ① 筋道立てて考え、話し合う力 |
| ② 自他を尊重した人間関係力と社会性、公共性、社会参画力 |
| ③ 自己を理解し、自己コントロールしながらなりたい自分を目指そうとする力 |

イ 「人間力活動科」の目標

集団活動や社会参画活動、自分づくり活動など様々な学習活動を通して、筋道立てて考える力や話し合う力の育成を基盤に、よりよい人間関係力や主体的に社会とかわり、共に生きる態度を養い、自己を理解し、人間として自律的な在り方や生き方について考え、よりよく自己実現しようとする資質を育てる。

ウ 「人間力活動科」の内容

- | |
|--|
| ① (ろんり) 筋道立てて考え、表現し、話し合う力を育てる。 |
| ② (つながり) 自他を尊重した人間関係力と社会性、公共性、社会参画力を育てる。 |
| ③ (自分づくり) 自己理解でき、自己コントロールしながらセルフマネジメント力を育てる。 |

エ 各内容の活動

自立(自己実現)や共生に関わる資質や能力を育成するため、必要となる「論理的思考力」、「人間関係力」、「セルフマネジメント力」を「論理的に考える活動」を基盤に「適切な人間関係を高める活動」や「自分づくりの活動」を通してはぐくむこととし、内容を次のように設定している。

内容	活動
ろんり	◇論理的思考活動 発達段階に即した思考の要素に基づく思考方法やシンキングスキルを身に付け、課題解決を図る活動 ◇話し合い活動 個人思考と集団思考を相互に関連付け、目的に応じて筋道立てて話し合い、課題解決を図る活動
つながり	◇同年齢活動(自他を尊重した人間関係) 同年齢集団における交流活動や課題解決活動 ◇異年齢活動(自他を尊重した人間関係)

	異年齢集団における交流活動や創造的活動 ◇地域交流活動 ◇社会参画活動（社会での共生する資質） 地域の人々との交流活動や文化的活動、コミュニケーション活動 発達段階に応じて市民生活者としてのモラルや技能を学ぶ活動
自分づくり	◇自己理解活動 自分を正しく理解し、自己肯定感を高める活動 ◇自己コントロール活動 自主性、自律性、意志力、耐性、責任、自制等自己制御の要素を高める活動 ◇なりたい自分活動 なりたい自分を考え、目標に向かう判断力や責任意識を高める活動 ◇体の自己管理活動 自分の健康や生活の自己管理能力を高める活動

オ 内容の構造

「論理的に考える活動」には論理的思考活動、話し合い活動、「人間関係を高める活動」には、同年齢活動、異年齢活動、地域交流活動、社会参画活動、「自分づくりの活動」には、自己理解活動、自己コントロール活動、なりたい自分活動、体の自己管理活動を位置付けた。

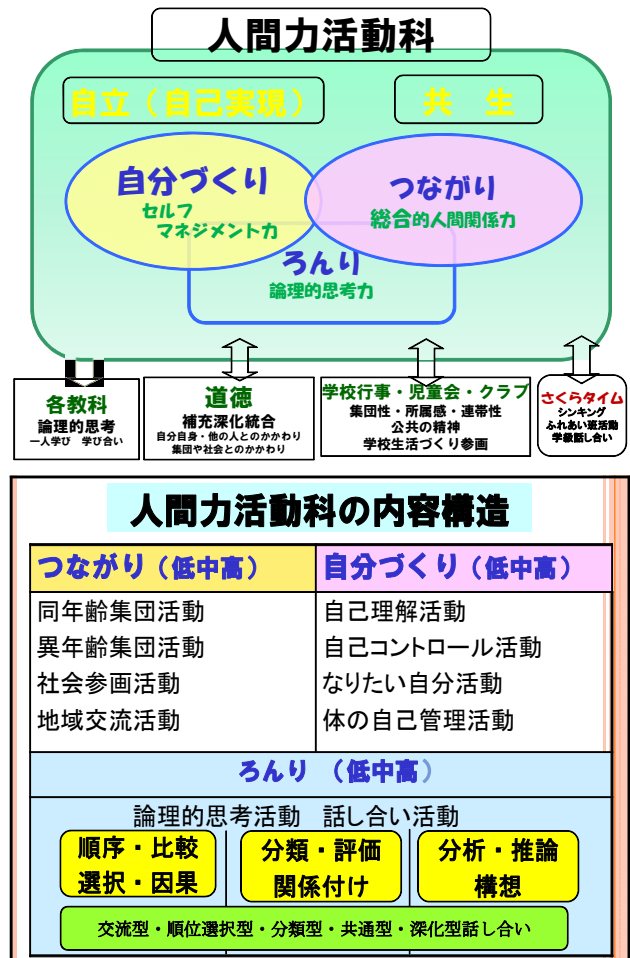
これら十の活動が人間力活動科として機能するよう、「論理的に考える活動」を基盤として「人間関係を高める活動」や「自分づくりの活動」を相互に関係付け、ユニット学習として総合化を図りながら取り組んでいる。

このことによって、活動については、それぞれ個別に独立するものもあるが、一つの方向にストーリー性をもった学習となり、子どもにとって必然性を意識するものとしている。

また、その際、核となる学習を学校全体の行事や取組と連動させることによって、年間の学校行事計画と人間力活動科の年間計画とを密接に重ねることとした。

カ 内容の系統化

「ろんり」「つながり」「自分づくり」の各内容ごとに発達段階に応じた「身に付けたい力」を児童実態アンケート（視点を設けた抽出児童による聞き取り調査と質問紙調査）や発達に関わる文献等によって再検討し妥当性を高めた。このことによって、本校児童の現状や課題を踏まえ、より発達の系統性に即した指導を行っている。



人間力活動科身に付けたい力

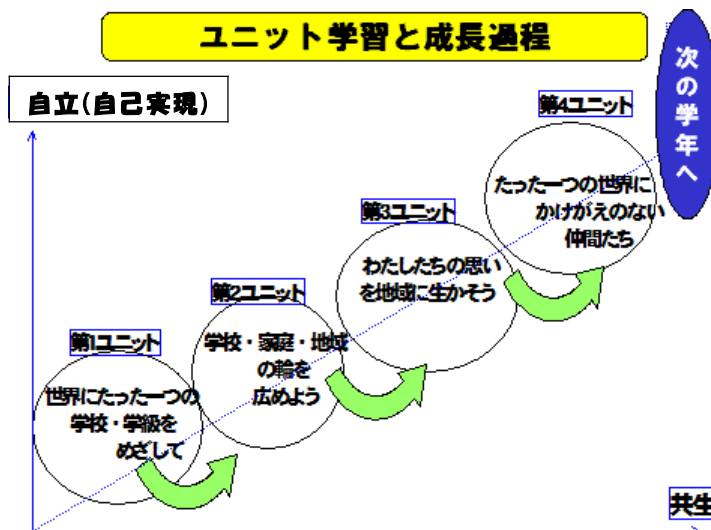


		低学年	中学年	高学年
つながり	人間関係力 社会的な身だしなみを重んじたコミュニケーション能力 一人ひとりの力を発揮する力 マシな人間関係力	・ 一人ひとりの力を発揮する力 ・ 一人ひとりの力を発揮する力 ・ 一人ひとりの力を発揮する力	・ 一人ひとりの力を発揮する力 ・ 一人ひとりの力を発揮する力 ・ 一人ひとりの力を発揮する力	・ 一人ひとりの力を発揮する力 ・ 一人ひとりの力を発揮する力 ・ 一人ひとりの力を発揮する力
自分づくり	セルフマネジメント力 自己理解力 自己管理能力 自己実現力	・ 自己理解力 ・ 自己管理能力 ・ 自己実現力	・ 自己理解力 ・ 自己管理能力 ・ 自己実現力	・ 自己理解力 ・ 自己管理能力 ・ 自己実現力
ろんり	論理的思考力 課題解決力 問題解決力	・ 課題解決力 ・ 問題解決力 ・ 課題解決力	・ 課題解決力 ・ 問題解決力 ・ 課題解決力	・ 課題解決力 ・ 問題解決力 ・ 課題解決力

キ ユニット学習の構想

「ろんり」「つながり」「自分づくり」の内容に基づいて構想した活動を個々に取り組むのではなく、各活動を総合化しストーリー性をもたせた学習としてのユニット学習を設定した。「論理的に考える活動・・・ろんり」を基盤として「人間関係を高める活動・・・つながり」や「自分づくりの活動・・・自分づくり」を相互に関係付け、共通テーマのもとにユニット学習として総合化を図った。ユニット学習においては、「ろんり」「つながり」「自分づくり」の三つの付けたい力を明確にしなが、テーマに沿って内容を関連付ける指導過程を構成した。

ユニット学習と成長過程



(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新設教科の設置（70時間） ・ シンキングプログラムについては、発達段階に応じた思考の要素に基づき思考方法やスキルの育成を位置付けたプログラムを作成し実践化を図る。 ・ 人間関係力の要素を明確にし、同年齢集団、異年齢集団、地域活動、社会生活の四つの視点からアプローチするプログラムを作成し実践する。 ・ セルフマネジメント力育成についての理論的研究を進めると共に、育成する視点を明確にした指導方法と系統的なプログラムを作成する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ユニット学習（総合的な課題の設定と活動の実践）を通して、3つの視点の総合化を図るカリキュラムの開発 ・先進的実践校、研究開発校への視察及び研究会への参加・研修 ・年度途中、年度末会議において、研究の成果と課題の検証を行う。
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・新設教科の設置（低学年70時間、中高学年105時間） ・「さくらタイム」ミニ人間力タイムの設置（週1回昼20分） 思考の日常化……シンキングシートの活用 話し合いの日常化……学級の日常的課題解決の話し合い活動 異年齢集団活動の日常化……ふれあい遊び ・一年次に作成したユニット学習と、課題設定の改善を図り、効果的なカリキュラム、指導方法の開発を進める。 具体的にはユニット学習の内容の見直しを図る。特に、付けたい力に沿ったユニット学習を設定し、ねらいを一層明確にし、地域活動「交流→発信→参画」の内容の充実を図る。 ・校内研修による理論研修、授業研究(全体研修会：講師による講演実施) ・先進的実践校、研究開発校への視察及び研究会への参加・研修 ・中間研究発表会の実施(H26.2.21実施) ・研究冊子の作成 ・年度途中、年度末会議において、研究の成果と課題の検証を行う。
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・新設教科の設置（低学年70時間、中高学年105時間） ・「さくらタイム」ミニ人間力タイムの設置（週1回昼20分） ・二年次に改善した三つのプログラムと、課題設定の改善を図り、ユニット学習など一層効果的なカリキュラム、指導方法の開発を進める。 ・評価規準と評価方法の改善を図り、指導と評価の一体化を進める。 ・校内研修による理論研修、授業研究 ・先進的実践校、研究開発校の研究会への参加・研修 ・研究発表会の開催（平成27年2月6日実施） ・研究冊子の作成 ・年度途中、年度末会議において、研究の成果と課題の検証を行う

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<p>新しい教科を設置したことで、三つの視点からの取組を通して、発達段階に応じた「論理的思考力・人間関係力・セルフマネジメント力」が身に付いてきていること、成果等がでてきていることを積極的に評価検証していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論理的思考力について学力テスト等により診断的評価を行う。 ・論理的思考力は、ポートフォリオや作品などにおける事前・事後評価を行う。 ・話し合う力については、ビデオ撮影したり観察したりして、事前・事後評価を行う。 ・人間関係力、セルフマネジメント力については、児童、保護者、学校関係者の事前、一年次末の実態アンケート調査（3つの視点から

	なる生活実態調査)で達成状況の把握を行う。・全学年、保護者 2月実施 ・各種会議における評価会議を実施する。
第2年次	一年次との経年変化を三つの視点から分析し、仮説で述べた「はぐくむべき力」が身に付いてきていること、成果等がでてきていることを積極的に評価・検証していく。 ・学力テスト等により論理的思考力について評価を行う。 ・論理的思考力や話し合う力については、ポートフォリオや作品などにより評価を行う。 ・論理的思考力、人間関係力、セルフマネジメント力については、児童、保護者、学校関係者のアンケート調査(三つの視点からなる実態調査)を行う。 ・三つの視点の経年比較を行い、成果と課題を明確にする。 ・公開授業研究会を通して外部評価をもらう。 ・各種会議における評価会議を実施する。
第3年次	二年次との経年変化を三つの視点から分析し、「はぐくむべき力」が身に付いてきていること、成果等がでてきていることを積極的に評価・検証していく。 ・学力テスト等における論理的思考力について評価を行う。 ・話し合う力については、ビデオ撮影や観察による評価を行う。 ・論理的思考力や話し合う力については、ポートフォリオや作品などにより評価を行う。 ・論理的思考力、人間関係力、セルフマネジメント力については、児童、保護者、学校関係者のアンケート調査(三つの視点からなる実態調査)を行う。 ・三つの視点の経年比較を行い、成果と課題を明確にする。 ・研究発表会、公開授業研究会を通して外部評価をもらう。 ・各種会議における評価会議を実施する。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

1 児童・生徒への効果

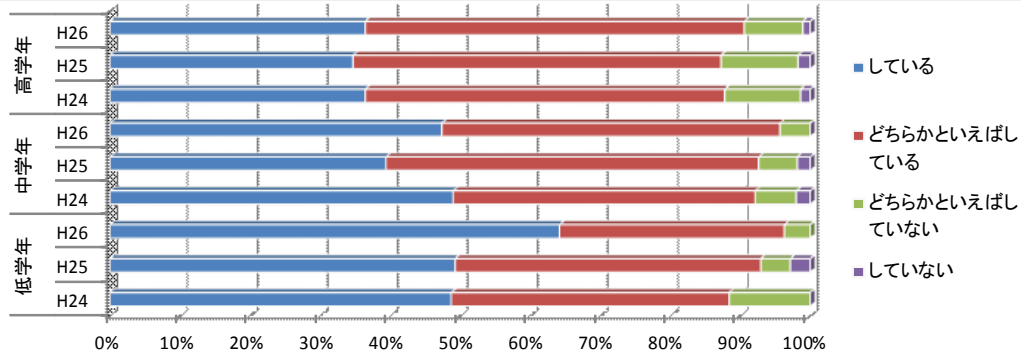
「ろんり」「つながり」「自分づくり」の視点のアンケートを行ったが、ほとんどの項目で1、2(している、どちらかといえばしている)と回答しており、合わせると8割を超えて、肯定的な評価に高い数値を示している。ただ、2年次から3年次でのアンケートの伸びは、大きな伸びとはなっていない。それは、児童が、自分自身を厳しく見つめ直しアンケートに答えたり、「人間力活動科」での学習の評価を考えたりしながら、答えているためと思われる。

具体的には、様々な行事の中で、子ども自身が育ち、周りの子どもと協力し合って育つことを見て、ユニット学習を通して子どもの力が高まる様子や、異年齢集団活動では高学年が引っ張るだけでなく、中学年が自らの責任を果たそうと努力する姿を見て、縦のつながりが深まってきたことも実感できている。また、ストレスマネジメントやアンガーマネジメントに取り組んだり、なりたい自分を認識させたりする中で、「自立した人間として育てる」意識が高まっているようにも思える。また、ろんりの授業で学んだ思考の方法を生かして、他の授業に生か

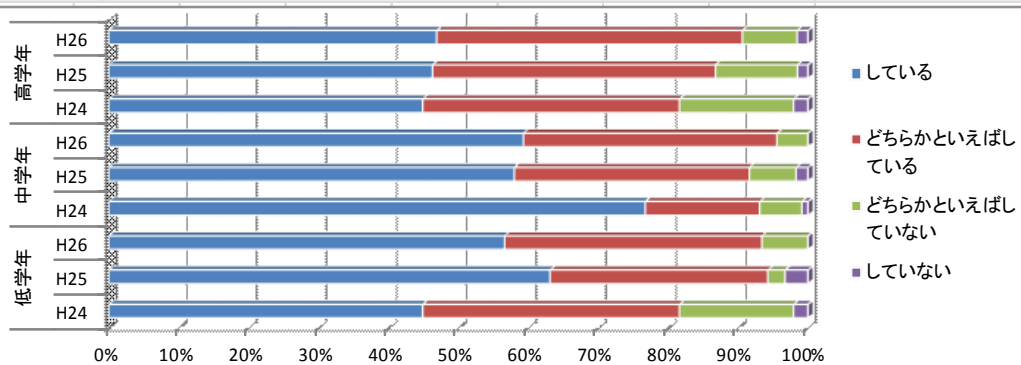
そうとする姿も見られている。

人間力活動科アンケート分析(児童)

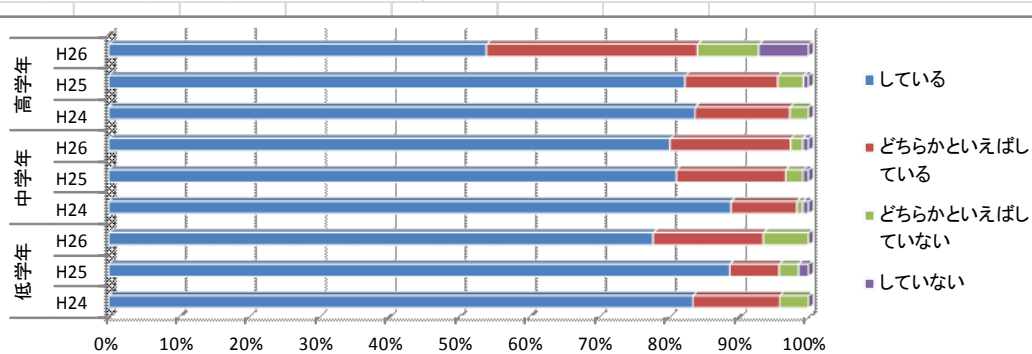
○学習の時、思考の要素を使って考えていますか



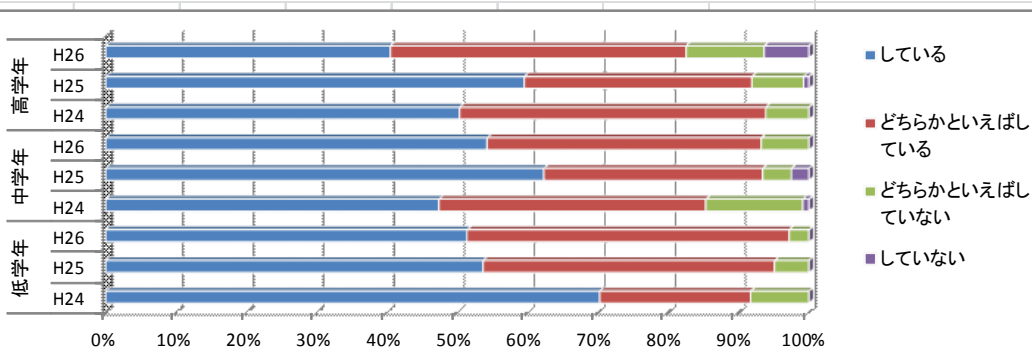
○話し合いに積極的に参加していますか



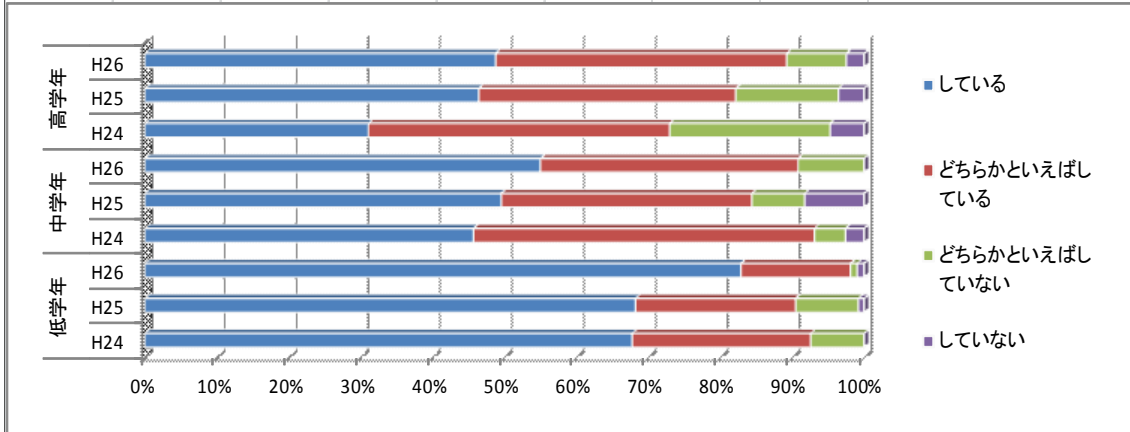
○学校、地域や家庭などで、他の学年と遊んだり話したりしていますか



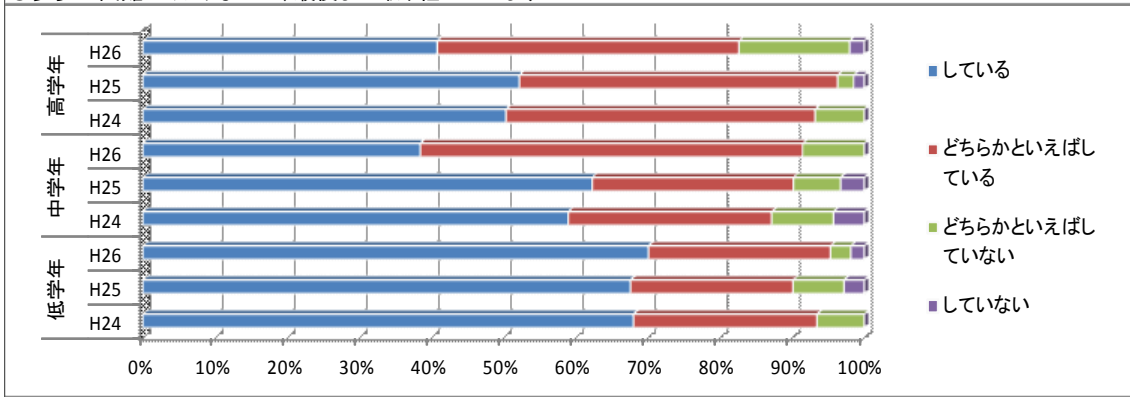
○社会や学校の中で、ルールやマナーを守っていますか



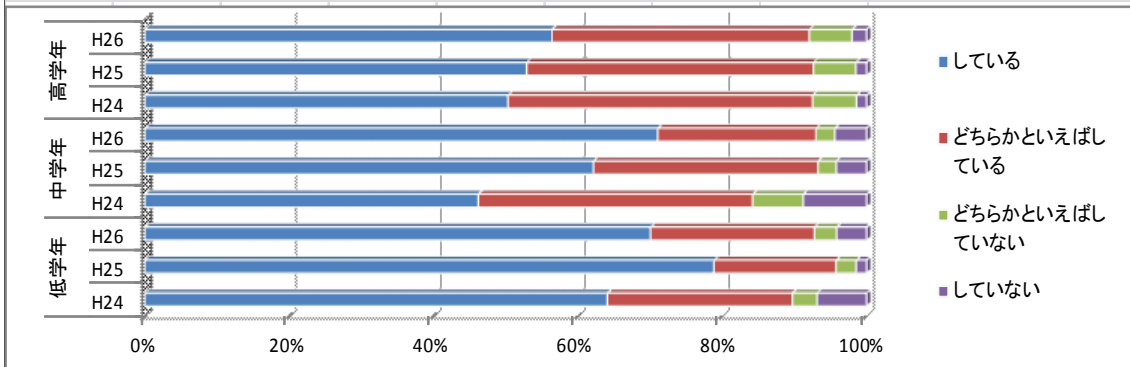
○自分の良さを知っていますか



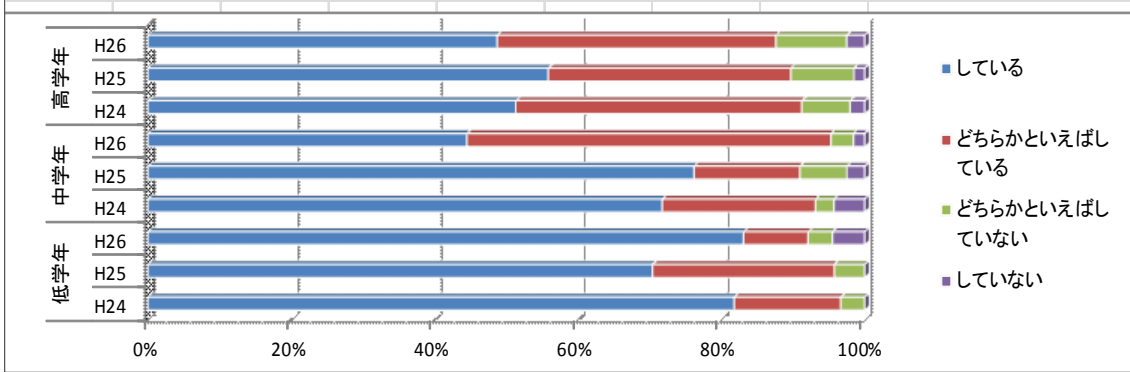
○多少の困難にくじけずに、最後まで取り組んでいますか



○自分がよりよくなるために努力していますか



○自分の体により食事をしたり運動したりしていますか



(2) 実施上の問題点と今後の課題

ア ユニット学習の再構成

ユニット学習の内容・指導過程については、付けたい力に沿って見通しをもって構成してきたが、児童の思いや考えを深めたり、支えたりする体験活動等の学習の位置付けが不十分であった。児童が見通しをもって主体的な活動を展開できるよう、内容構成の段階で緻密な計画をもつことが必要である。

また「A→P→D→C→A」における各指導内容の位置付けをねらいに即して柔軟に設定し、効果的な学習が達成できるようにすることが必要である。また、学級の突発的な課題等については「さくらタイム」で話し合うなどの取組を行ってきたが、課題がユニット学習に関連付けられるものと考えられる場合は、有効な学習課題として取り入れる柔軟な指導過程にすることが考えられる。

さらに、各ユニットでは「ろんり」「つながり」「自分づくり」の学習内容をさらに効果的に位置付け、児童が必然性を感じ見通しをもって主体的に取り組めるストーリー性の精度を高める必要がある。

イ 授業と評価の改善

取組に対してどう評価するかではなく、学習指導要領の目標に対してどう評価するかという評価規準を検討し作成したが、評価の視点や規準を一層明確にし、授業づくりに生かせるようにする。さらに、児童の変容を的確にとらえられるように、評価方法や評価時期などを明確にする必要がある。具体的には、ワークシート等教材教具の工夫を図ったり、学習計画や学習内容、目標や自分の変容の可視化を効果的に行ったり、アンケートやポートフォリオを有効に活用することが必要である。

ウ 各内容の充実

① ろんり

ユニット学習の学習過程で、発達段階に応じた思考の要素を活用して、目標や目的を考える時間や活動内容を考えることが習慣付いてきたが、シンキングシートを授業の中で十分活用しきれていなかったり、特定の思考方法に偏ったりすることがあったため、身に付けたい思考の要素については活用できるようにする指導の工夫を図っていく。さらに、「ろんり」の力を、児童一人一人に確実に身に付けさせるために、各教科・領域などのあらゆる機会に、継続的に指導する必要がある。

② つながり

ユニット学習の指導過程に、様々な学年や地域の人たち、外部人材との交流を一層設定し、児童の考えや思いを発信する活動を増やすことで、自分たちの取組に対する自信や確信を高めていくことが大切だと考える。そのことが、様々な創作活動や授業形態を広げることにもつながると考える。また、ユニット学習ごとに付けるべき力に沿って指導過程の見直しを行い、付けるべき力に沿った重点化を図り、ユニット単元を見直す必要がある。社会参画活動においては、誰に、どのように発信するのか、児童の発達段階も踏まえ、系統性を整理する必要がある。

③ 自分づくり

サクセスフルセルフとして位置付けている「ストレスマネジメント」等については授業時間の位置付けが少なく、十分な定着に至らないことがあったため、何故この学習が必要かという各ユニット学習への位置付けを適切に考えることが必要である。自己理解活動については、児童一人一人が、自分のよさを認識し自尊感情が高まる学習となるように改善する必要がある。また、体の自己管理の学びについては実施時期や指導内容の再考に取り組みたい。